

佐賀新聞 2011(平成23)年12月9日(金)

剣禅書の達人

山岡鉄舟展

山岡鉄舟が53年の生涯で書き残した書は、その数、100万枚ともいわれる。根拠は不明だが、1885(明治18)年には1年間で18万1千枚書いたと鉄舟は回想している。1日平均約500枚も書いたことになり、驚くべき数といえよう。同時代のたとえば副島種臣は生涯で数千、多作だった中林梧竹でも数万と目されており、鉄舟は桁違いに多い。

鉄舟は書とのかかわりについても回想している。つまり、1845(弘化2)年、10歳の鉄舟は父高福の飛騨高山郡代転任に同行して高山(今の岐阜県)に移り住み、その頃、毎日武芸を学び、暇あれば習字を行った。

福井 尚寿

県立美術館学芸課主幹



山岡鉄舟の書「至誠如神」(全生庵所蔵)。太い筆でぐいぐいと力強い文字が特徴だ

父は鉄舟を高山の書家、岩佐一亭に学ばせ、一亭は漢字の手本として「千字文」を書写して与えた。鉄舟は、それを約1カ月書写し、ようやく字形が整うようになった。父は鉄舟に千字文の千字を楷書で清書することを命じ、紙63枚を与えた。夜のこたであったが、鉄舟はすぐに書きはじめ、わずかに時間足らずで仕上げ、その大人まじりの筆跡と速きは、父と一亭を驚かせた。

父は鉄舟を高山の書家、岩佐一亭に学ばせ、一亭は漢字の手本として「千字文」を書写して与えた。鉄舟は、それを約1カ月書写し、ようやく字形が整うようになった。父は鉄舟に千字文の千字を楷書で清書することを命じ、紙63枚を与えた。夜のこたであったが、鉄舟はすぐに書きはじめ、わずかに時間足らずで仕上げ、その大人まじりの筆跡と速きは、父と一亭を驚かせた。

父は鉄舟を高山の書家、岩佐一亭に学ばせ、一亭は漢字の手本として「千字文」を書写して与えた。鉄舟は、それを約1カ月書写し、ようやく字形が整うようになった。父は鉄舟に千字文の千字を楷書で清書することを命じ、紙63枚を与えた。夜のこたであったが、鉄舟はすぐに書きはじめ、わずかに時間足らずで仕上げ、その大人まじりの筆跡と速きは、父と一亭を驚かせた。

父は鉄舟を高山の書家、岩佐一亭に学ばせ、一亭は漢字の手本として「千字文」を書写して与えた。鉄舟は、それを約1カ月書写し、ようやく字形が整うようになった。父は鉄舟に千字文の千字を楷書で清書することを命じ、紙63枚を与えた。夜のこたであったが、鉄舟はすぐに書きはじめ、わずかに時間足らずで仕上げ、その大人まじりの筆跡と速きは、父と一亭を驚かせた。

書き残した書は100万枚

「山岡鉄舟展」は県立美術館で1月15日まで。12、19、26、29、31日と1月10日は休館。観覧料は大人600円、大学生300円、高校生以下無料。県立美術館と全生庵、佐賀新聞社でつくる実行委員会主催。問い合わせは県立美術館、電話0952(24)3947。

◆メモ◆

おわり

な意味を持っていたのだろう。勝海舟は「彼(鉄舟)の晩年の書は、なかなか出来ている。要するに、書、剣、禅共に、いやいや宇宙の万機、皆その揆一なりということを記憶しておくことが大切だ」と、鉄舟晩年の書が剣と禅と不可分な関係にあったことを指摘している。